
夜の歌舞伎町

峰春秋人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜の歌舞伎町

【Nコード】

N10100

【作者名】

峰春秋人

【あらすじ】

銀魂のホスト夢です。

どうぞどうぞみてくださいw

ちっぽけな空（前書き）

みじかいぞー

ちっぽけな空

貴女は今恋してますか？

してないその貴女。今すぐに歌舞伎町のとあるホスト部へ行きなさい。

そこでは、誰でも愛をもらえる。

貴女好みの人がきつというはずですよ。

では、私はこの辺でまた後ほどにでも・・・。

- 4時 歌舞伎町

夜の歌舞伎町がもう姿を消してシャッターがやたら目立つ。

けどまだ薄暗い。

そんな街中を一人の女が歩いていた。

酔っ払いではないシラフの女性が何かを探すかのようにきょろきょろとしている。

「何か探し物ですか？」

首をかしげて女性に話しかけたのは銀髪の男だった。

につこりと笑顔を作って女性へと手を差し伸べる。

驚きを隠せずにびくつきながら彼女は口を開いた。

「財布を落としてしまって・・・。」

悲しげな眼で言われて銀髪男も同じ顔をする。

そして、自分も探しだす。女が止めても探し始める。

助かったような顔をして女も搜索を再開させた。

「あ・・・あつた！」

女の声に銀髪は「よかった。」と笑うだけ。

深々とお辞儀をしていなくなる。

「はあ、どうせあいつも顔しか見てないだろ？」

溜息をつきながら皮肉を放つ男に銀髪はキッと睨みを決め込んだ。

黒髪的眼帯男はひるんだ様子もなくただ「クツクツク。」と笑った。

「女なんてどうせ体か、顔しか見てないさ。」

「おい！高杉！」

「何さ？なら、お前はそうじゃないと言えるのか？なあ、銀時。」

銀髪男・坂田銀時は下唇をぐつと噛みしめて言葉を詰まらせる。

黒髪眼帯・高杉晋助は闇のように深く黒い瞳を銀時に向けていた。

二人の間に張りつめた空気が流れる。

「おーおんしら、まだ帰つとらんかったか。」

のんきな声を上げながら走って来るのはモジャ毛の男。

サングラスの奥の瞳はまっすぐに綺麗だ。

「ほかの二人はどうした？坂本。」

高杉が尋ねるとモジャ毛・坂本辰馬は首を振って「帰った。」と一言言うだけだった。

三人は明け方の歌舞伎町を歩きながら喋りあう。

「そういえば、高杉に付きまっていたあのギャルももとは坂本の客じゃなかったか？」

「さーな……。アイツはいいカモになるぜ。」

「晋助。お前お客さんをかも呼ばわりするなとなんかい言ったきにか？」

「覚えてねえ。」

「おんしもか！実はワシも覚えてない。」

照れた様子で頭をかく坂本は笑った。

二人も小さく口をつり上げた。

その時、

「死ねえええ！！」

静かな歌舞伎町通りで怒声が響く。

高杉が振り向いたとき目の前にいたのは一人の女性だった。手元にギラリと光るものが高杉の頬をかすめた。

「ッ痛。」

「てめえーのせいで・・・姉貴が死んだんだああ！！」

見知らぬ女性に怒鳴られたかと思えば包丁で切りつけられて拳句の果てには殺人の罪まで・・・。

隣にいた銀時と坂本は何もできないまま高杉から一步下がっていた。高杉は状況はわからないものの切りつけられたことに怒り狂い女性の顔に殴りかかろうとした。

女性はギュツと目をつぶって頭を押さえた。
が、

「喧嘩両成敗。」

はつきりとした青年の声が響き高杉の拳をつかんで右へと捻った。もちろん高杉の方も右へとひねられる。

そして、女性の両手をつかんで拘束していた。

驚くみんなの前にいたのは紺色の髪のをポニーテールにした赤い目の青年だった。

三人と同じスーツを着ている。年齢は十代後半くらいに見える。

「つてめ・・・離せ！」

「・・・。」

無言で手を離す青年の目は高杉を小さく睨みつけていた。

「この女性のお姉さんはあんたの指名者だよ。さっきの話通り、カモにしてたんだろ？金がないから捨てたらこっちのお姉さんは自殺。帰らぬ人となった。」

淡々と説明する青年。

けど、不思議なことに女性の味方をしてるわけではなさそうだ。

「けど、あんたもさ一人に斬りかかるなんて馬鹿じゃないの？カモにされたあんたのお姉さんだってコイツと同じだと思っけどな・・・。早く帰りな。次顔を現すなら警察に突き出すよ。」

「・・・ッグ。」

下唇と噛みしめて女性は走り去ってしまった。
頭をかくと二人に向き直る。

「あんたらクラブ・Just a Wayの人たちでしょ？」

「・・・なんで知ってる？」

「ちよつとね。」

青年は首の裏をかくと四人を見て手を振った。

「それじゃ、また。」

「おい！」

「ん？」

いきなり高杉に呼びとめられて青年は首をかしげた。

ポケットに手をつ突っ込んで上から二つボタンを取って白い首筋が目立つ。

「名前は？」

「自分から名乗れば？」

「・・・高杉晋助。」

「てんせい ゆうが天正優雅。」

「どこのホストだ？」

「えりーARIってところ。」

「はあ？あの歌舞伎町の五本指に入るつわものがある！？」

銀時が食いつくかのように前に出た。

優雅はにやりと笑って手をひらひらと振ると歌舞伎町の闇へと消えて行った。

しばらくは三人ともその場を動かないでいた・・・。

「はあ？あの^{えりー}ARIの奴に会ったのか？」

土方が煙草に火をつけながら銀時に尋ねる。

隣では沖田がランプを山状にして積んでいた。

「そつなんだよ。優雅ってやつ。」

「優雅・・・？ああ。そいつなら知ってますぜ。」

「本当か？」

椅子に反対向きに座りながら銀時は沖田に向き直る。
沖田は近くのパソコンで「天正優雅」と打ち込む。
すぐに写真と一緒にプロフィールが出てきた。

「天正優雅。 16歳でA R Iの？2に上がった奴でさあ。 13歳でこの世界に入って雑用をして元の美貌でのぼりつめた。と書いてありますぜ。」

「13歳でこの世界に・・・。」

「大したもんだな・・・。」

「それより早く仕事に取り掛かりましょうぜ。」

「そうだな。」

土方と沖田は先に腰を席から浮かすと控室を出てロビーへとむかった。

きらびやかな装飾に眩しいほどのライト。

女の子たちはきらきらと輝いている。

「あー土方さん！こつちですよー。」

「沖田君もこつちこつち！」

女の子たちに手招きされて二人はその席へと近づいた。
小さくお辞儀をして隣に座る。

「今日はごしめいありがとうございます。」

「今夜も楽しんでけよ。」

二人の言葉に女どもはメロメロだった。

ほかの席でももう接客は始まっているらしく高杉も銀時も笑顔を作

って接客をしていた。

「どんぺりくださあい!!」

「私は銀にシャンパンタワー!」

「辰馬さんにオレンジジュース。」

大声で注文する女は喜びの声であふれていて明るかった。
銀時や辰馬たちも笑って接客をしていた。
が、高杉はそうもいかない。

「注文しないのか?」

「じ・・・実は・・・。」

「金がねえってか?」

ビクリと体を震わせて女は涙目で高杉に抱きつく。
冷酷な目で女を見下げる。

「お願い!捨てないで!!私はすごく高杉さんが好きなの!だから・
・。」

「触るな!金もないのに俺になれなれしくするな。」

と高杉が女に手を出した。

女は「キヤー!」と悲鳴をあげて椅子に倒れ伏す。

その声を聞いてあきれたように土方がやってきて高杉の頭をたたく。

「てめえーは本当に何度言ったらわかるんだ?客に手を上げるなつて。」

「はあ?金がねえ奴は・モガツ!」

何かを言いかけた高杉の口に沖田が布を当てて喋れなくさせる。

その間に銀時が女の手を握って立ち上がらせる。

「高杉は少々機嫌が悪くてあんなことを言ってしまったのです。お許しください。」

そつと手にキスをして銀時は女に膝間づく。

辰馬も深々と頭を下げて謝る。

ほかの客達はうらやましそうに、怖そうにこちらを見てはひそひそと話しこんだ。

相変わらず高杉はもごもご言ってるけど。

「それでは今回は私がどんペリをごちそうします。それで許してもらえとは思いません。けど、少しでも心行くまで楽しんでもらいたいです。」

銀時は優しく言うのと隣に座って笑った。

こうしてまた J U S T A W A Y にも最初と同じ空気が流れる。

「おい！晋助。何度言ったらわかるきに？客に手を上げるなど言うとするやろ。」

「うるせえ！金がないのに来て借金背負っただけだろ？」

「だからってカモにしていい理由はどこにもねえぞ。」

「・・・フンッ。」

辰馬と土方にこっぴどく怒られて高杉は機嫌を損ねた。
営業時間も終わって五人とも帰った。

「ったく・・・。」

頭をかきむしって煙草に火をつけながら高杉は裏の入口から出てきた。

壁にもたれかかってまだ暗い歌舞伎町の空を見上げる。

星がちりばめられた空をみて、

（星の数ほどの女と男……。一等星の男と女はよつぼどの美人、美男だな。）

なんておかしいことを思う。

その時、

「歌舞伎町の空は小さい。」

いきなり右から声が聞こえて高杉はそちらを睨む。

逆光で姿は見えないものの徐々に影はこちらに近づいていた。

「歌舞伎町の星は小さい。」

靴の音がカツカツと鳴り響く。

「歌舞伎町のホストは……。小さい。」

やっと顔が見えるくらいの距離まで来た。

高杉は予想していた顔が現れたことに少し口元をつり上げた。

「何しに来た？天正優雅。」

「何って……。別に。特に理由はない。」

「……。偵察か？」

「なんで？2のうちのらが偵察？おかしいでしょ。」

少し馬鹿にした笑い方をされて高杉はむっとした顔をする。

優雅は高杉の横を通り過ぎて反対側へと行く。

「あんた今日・・・また事件起こしたって？」

「なんでお前が知っている？」

「そのお客さんはこっちの常連さんになりそうなんだ。」

「はあ？」

高杉は背中越しに感じていたあざ笑うかのような空気にカチンと来てすごい形相で優雅を睨んだ。

それでも優雅はニタニタと笑っていた。

「しょんぼりしてるところを捕まえて優しくしたらいちころだよ。まあ、お金がないのは置いといて優しい子だったよ。一途で清楚な感じ。あーもったいないね。」

「てめえーずるいぞ！」

「ずるい？なんでさ？捨てたのはそっちでしょ？それを拾ったのはこっち。」

ポケットに手をつこんだまま嘲笑って優雅はまた歩を進める。

「あ、そうそう。借りちゃんと返してね。いつでもいいから。まあ、期待してないけど。」

そういつて優雅は消えた。

薄暗い歌舞伎町の中に。

強く握り拳を作って殴る気満々だった高杉だったがそれは次回のお預けにした。

いつかまた会った時は殴る。

そう心に決めた。

煙草を地面に投げ捨てて靴底で踏みつぶす。
そして、歌舞伎町の中へと消えて行く。

ちっぽけな空（後書き）

わー
W
A
W
A
W
A

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1010o/>

夜の歌舞伎町

2010年10月12日02時44分発行